



編集に寄せられた『偕行』誌にまつわる心温まるエピソード

佐藤 正 陸自78

12月号に奥村快也氏(陸自70)の偕行現代考「高くて悪いが…」が掲載されました。

以下、奥村氏から聞いた話です。ある日、仙台で病院を経営している中学校時代の同級生(医師)から突然、奥村氏のところへ電話がありました。「今日、患者さんの部屋に『偕行』という雑誌が置いてあったので、何気なくめくったら、奥村君が書いた記事を見ました。懐かしくて電話をしたんだよ」。おそらく、その患者さんは偕行社の会員で、ご家族が病院に届けたのでしょう。『偕行』が縁で旧友と久しぶりに会話をしたという、思わず笑みがこぼれる温かなエピソードでした。

毎月ご自宅に送られてくる『偕行』誌を、入院されていたり、施設に入院されている会員に、ご家族が届けているという話を伺うことがあります。

この話を聞いて1月号「短歌教室」の伊東百合子様(準60)の作品「偕行を施設の中で回覧す涙流して読む人もあり」の一首を思い浮かべました。次に、『偕行』のウェブサイトを覗いていた方から柴田編集委員長宛に届いたメールの紹介です。

「11月号に戦艦陸奥の記事が掲載されていることに気づきました。私が大学生の頃、最後の艦長であった三好艦長のご子息筋の兄弟(鎌倉在住)に数学と理科の勉強を教えてくださいました。今もときどき、

お母さまが私の実家へ差し入れを届けてくれたり、お付き合いが続いています。兄弟そろってきちんとした、好青年たちでした。」

11月号の平川満氏(陸士60)による「戦艦『陸奥』爆沈の真相」については、「筆者の同期生で親友でもある三好艦長のご子息に対する心のこもった、大変素晴らしい記事だった」という読者からの声をいただきました。ウェブサイトを覗いておりました。ウェブサイトを覗いていた一般の方からの反響というのは、編集担当にとっても予想外のことで、世の中はいろいろなご縁で繋がっていることに改めて心が動かされました。

平川氏からいただいたお手紙でも感動的なエピソードの紹介がありました。

10月号に「私の終戦」が掲載され、読者の手元に届いた3日、10日程の間に、「読んだぞ」という同期生からの電話や手紙が5件ほど寄せられたとのこと。その中のお一人で平川氏より2カ月ほど早く航空士官学校(60期航空1次。平川氏は60期航空2次)に入校した同期生から、「終戦時の航空士官学校・内地の状況は全く分からなかったが、今回の記事でよく判った。ありがとう」という手紙をいただいたそうです。60期航空士官学校第1次入校者は、満洲に移動中に終戦を迎え、その後、朝鮮を放浪の挙句、8月31日に帰校したため、終戦時の航空士官学校の状況や同期生の心情、内地の様子が分からなかった由。平川氏の記事で74年前の空白が埋まったエピソードでした。